能作書条条

　一、先、種・作・書、三道より出たり。一に能の種を知る事、二に能を作事、三に能を書事也。本説の種をよくよく案得して、序破急の三体を五段に作なして、さて、詞を集め、曲を付て書連なり。

一、種とは、芸能の本説に、其態をなす人体にして、舞歌のため大用なる事を知るべし。抑、遊楽体と者、舞歌なり。舞歌二曲の態をなさざらん人体の種ならば、いかなる古人・名匠なりとも、遊楽の見風あるべからず。此理を能能安得すべし。

たとへば、物まねの人体の品品、天女・神女・乙女、是、神楽の舞歌也。男体には、業平・黒主・源氏、如此遊士、女体には、伊勢・小町・祇王・祇女・静・百万、如此遊女、是はみな、其人体いづれも舞歌遊風の名望の人なれば、これらを能の根本体に作なしたらんは、をのづから遊楽の見風の大切あるべし。又、放下には、自然居士・花月・東岸居士・西岸居士などの遊狂、其外、無名の男女・老若の人体、ことごとく舞歌によろしき風体に作入て、是を作書すべし。如此大切の本風体を求め得るを、種と名付。

　又、作能とて、さらに本説もなき事を新作にして、名所・旧跡の縁に作なして、一座見風の曲感をなす事あり。是は、極めたる達人の才学の態なり。

二、作とは、種をばかやうに求め得て、さてよくよくなす所を定むべし。

先、序破急に五段あり。序一段、破三段、急一段なり。開口人出て、さし声より、次第、一歌まで、一段。自是破。さて、為手の出て、一声より一歌まで、一段。其後、開口人と問答ありて、同音一謡、一段。其後又、曲舞にてもあれ、只歌ひにてもあれ、一音曲、一段。自是急。其後、舞にても、はたらきにても、あるひは早曲・切拍子などにて一段。已上五段也。若は、本説の体分によりて、六段ある事もあるべし。又は、品によりて、一段足らで、四段などある能もあるべし。先、本風体と定所、五段也。

　此五段を作り定て、「序にいかほどの音曲あるべし。破三段に三色の音曲いかほど、急に似合たる曲風いかほど」と、音曲の句数を定めて、一番を建立するを、能作とは申也。能の品かかりによりて、音曲の序破急、をのをの曲付変るべし。能一番の長短、五段の音曲句数を以て計るべき也。

三、書とは、其能の開口より、出物の品品によりて、「此人体にては、いかやうなる言葉を書きてよかるべし」と案得すべし。祝言・幽玄・恋・述懐・ぼうをく、色色の縁によるべき詩歌の言葉を、能の風体によりて、取り宛てがひて書べし。

　能には、本説の在所あるべし。名所・旧跡の曲所ならば、其所の名歌・名句の言葉を取る事、能の破三段の内の、詰めと覚しからん在所に書べし。是、能の堪用の曲所なるべし。其外、よき言葉、名句などをば、為手の云事に書べし。

　かやうに、この条条を取り宛てがふを、能を書とは申也。

　　　　種・作・書、三道、以上。

三体作書条条　老・女・軍、是三体也

　一、老体。是、大方脇能の懸也。先、祝言の風体、開口人出て、次第より一謡一段に、音曲、五七五、七五七五と行事、七八句謡ふべし。七五を一句と定、只歌一首を弐句と可得心。

　さて、為手の出て、自是破一段、老人夫婦などにて、五七五・七五の一声より、七五七五二句過て、さし声より七五七五と行事、十句斗也。下て謡ふより、甲の物までの一歌い、十句斗也。自是破二。さて、開口人と為手との問答、言葉四五づつに過べからず。此問答に、又、老人夫婦など、事の謂れを問答うて、云開事あり。其も又、二三づつに過べからず。さて、甲の物にて、みな同音に謡い出す事より開聞在所歟、謡ひ止むるまで、十句斗を二切れに謡ふべし。自是破三。其後、曲舞などあらば、上声五句斗、さし声五句斗、下て云納むるまで五六句斗、曲舞十二三句歟。甲物十二三句斗歟。其後、謡論義二つ三つづつ謡ひて、わさわさ軽軽と謡ひ止むべし。

自是急。其後、出物の人体、天女・男体、いづれにてもあれ、橋がかりにて、甲物・さし声云流して、一声上て、後句は、同音などにて、長長たぶたぶと上げ流して、云下すべし。さて、責め論議二つ三つづつ謡ひて、かかりたる音曲にて、軽軽と遣りかけて謡ふべし。又、出物の舞楽開眼在所不定の人体によりて、切拍子などにて入る事もあるべし。いづれもいづれも、長くては悪かるべし。長短の事、音曲句数を以て計らふべし。

　是、序風の能姿、大概也。脇の能には、助など出て似合かかりなれば、老体の風に定まる也。此外、老体の能姿、品品によりてあるべし。

　又、女体の祝言、五段の風体、是同。

一、女体の能姿。風体を飾りて書くべし。是、ことに舞歌の本風たり。其内に於きて、上上の風体あるべし。あるひは女御・更衣、葵・夕顔・浮舟などと申たる貴人の女体、気高き風姿の、世の常ならぬかかり・よそをいを、心得て書べし。しかれば、音曲・よしかかりをも、よくよく心得て、道の者の曲舞音曲などのやうにはあるまじき也。長けたるかかりの、美しくて、幽玄無上の位、曲も妙声、振り・風情も此上はあるべからず。少しも不足にてはかなふべからず。

　かやうなる人体の種風に、玉の中の玉を得たるがごとくなる事あり。如此の貴人妙体の見風の上に、あるひは六条御息所の葵の上に付祟り、夕顔の上の物の怪に取られ、浮舟の憑物などとて、見風の便りある幽花の種、逢ひがたき風得也。古歌云「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせむ」より、なを有りがたき花種なるべし。しかれば、かやうの風に相応したらん芸人をや、無上妙感の達人とも申べき。

此外、静・祇王・祇女などは、人体白拍子なれば、和歌を上げ、一声を長め、八拍子にかかりて、三重の声曲をなし、責めを踏んで、舞入に入る風体なるべし。かやうなるには、切拍子の静かならんかかりを入はにせん事、似合べき也。又、百万・山姥などと申たるは、曲舞舞ひの芸風なれば、大かた易かるべし。五段の内、序・急をさし寄せて、破を体にして、曲舞を本所に置て、曲舞二段ばかりを、後段をば揉み寄せて、道の曲舞がかりに、細かに書きて、次第にて舞ひ止むべし。

　又、女物狂の風体、これは、とても物狂なれば、なにとも風体を工みて、音曲細やかに、立振舞に相応して、人体幽玄ならば、なにとするも面白がるべし。よそをひを美しく、曲のかかりを工み寄せて、事を尽くし、色を添へて作書すべし。

如此、上果風より、貴人、白拍子・曲舞舞い・狂女、色色を心得分て、其芸道の筋目筋目を宛てがひて作書する事、能の道を知りたる書手なるべし。

　一、軍体の能姿。仮令、源平の名将の人体の本説ならば、ことにことに平家の物語のままに書べし。

是又、五段の程らい、音曲の長短を計らふべし。又、入り変りて出る事あらば、後の切れに曲舞などあるべし。しからば、破が急へかかるべし。かやうなる能は、六段などにもなるべし。又、入り変らねば、四段なるもあり。能によるべし。初めの切れを引き寄せて、短か短かと書べし。

　軍体の風姿、本説によるべきほどに、書やうのかかり、一偏に定まるべからず。音曲なども短か短かと書きて、急をば、修羅がかりの早節にて入べし。人体によりて、怒りてよかるべきもあるべし。けなげかる節かかりにて、揉み揉みとあるべし。

軍体の出物、定めて名のり声あるべし。心得て書すべし。

　　　　三体能作、以上。

一、放下。是は、軍体の末風、砕動の態風なり。自然居士・花月、男物狂、若は女物狂などにてもあれ、其能の風によりて、砕動の便風あるべし。

　開口人の序一段過て、打ち立てて待所に、放下の出立に仕立を飾りて、橋がかりより、さし声たぶたぶと云て、古歌にても、名句などにてもあれ、耳近に、しかも面白き文句を、さし声より只詞まじりに、七八句云下して、さて一声にかかるべし。かやうなる物まねは、ことにことに、、橋がかりの遠見の風体、声聞意曲を奮ひて出来るよそをひなるべし。此分を心得て、言葉を尋ね、品を求めて作書すべし。さて、さし事の序より謡ふ事、少な少なと、さらりと謡ふべし。世の常の序分の音曲の長さなるべし。さて、開口人と問答、理を責めて、詞論義四つ五つづつばかり、甲物の謡十句斗、いかにもいかにも軽軽浮き浮きと曲付すべし。舞より曲舞に至るまでも、揉み揉みとあるべし。急には、早節・落し節など、色色に工み色どりて、風体を飾るべし。

かやうの能、あるひは、親に逢ひ、夫婦・兄弟などの尋ね逢ふ所を、結びて入はにして、入る事あり。さやうならん能ならば、破の三段目に詰め所の急風を書きて、入はの段をば、謡論義にて、親子・兄弟などの逢ひ場ならば、少し泣き能の意風の気色にて、結びて入べし。是体なる能の風体、大かた、物狂と同じ見風の気色なるべし。

一、砕動風鬼の能作。是、軍体の末流の便風也。是は形鬼心人也。

かやうの能、他分、二切れの能也。初め三段、若は二段ありとも、短か短かと書て、後の出物、定めて霊鬼なるべし。橋がかりのさし声、生き生きと四五句云かけて、一声より舞台際へ踏み寄りて、細かに身・足をつかひて、物を云かけ云かけ、落し曲あるべし。さて、甲物十句斗、同音に早早軽軽と謡ひて、若は又、責め論義など三つ四づつありてもよかるべし。急は、早曲・切る曲などを責めかけて曲付すべし。節がかりによりて、はたらきに花体の見風あるべし。よくよく曲風を安得すべき書作也。

　又、此外、力勣風鬼有。力動風鬼は、勢形心鬼也。其人体、瞋る態相の異風也。此風形、当流に不得心。只、砕動風鬼、以此見風と成所也。

　一、如此条条、能能見得して、書作すべきなり。

爰に又、開聞・開眼とて、能一番の内、破・急の間に是あり。開聞者、二聞一感をなす際也。其能一番の本説の理を書きあらはして、数人の心耳を開く一聞に、又、其理をあらはす文言、曲声にかなひて、理・曲一音の聞感をなして、即座に一同の褒美を得る感所也。理・曲二聞を、一音の感にあらはす堺を、開聞と名付。

　又、開眼者、其能一番の内に、見風感応の成就の眼をあらはす在所あるべし。舞動風体の間に、即座一同の妙感をなす所なり。是は為手の感力の出風なり。筆者の作書にはあるまじきかなれども、かやうの眼曲も、其風をなすべき在所なくばあるべからず。しかれば、舞曲をなすべき能所をよくよく安得して、作書すべきなり。一番の眼を開く妙所なれば、開眼と名付。

　仍、開聞は筆者の作、開眼は為手の態なるべし。両条一作の達人に於いては、是非あるべからず。又、開眼一開之妙所可有。口伝。可尋。

一、童の能を作書するに、心得べき事あり。童体などの、脇の為手にて、あるひは人の子になり、息女などにならん事は、もとより人体に似合ふ上は、是非あるべからず。独り能ならば、似合はぬ風体をせさすべからず。似合はぬ事とは、児の能に、親か母などに成て、子を尋ね悲しむ風体に、なを幼き物を子か息女などになして、親子巡り逢ふ由にて、取り付き、縋り付きて、泣き嘆く風体は、返返、よそ目俗也。「幼き者の能は、よくすれども、酷き所の見風ある」などと、見所より嫌ふ事のあるは、是体なる能によて也。只、幼き時の独り能ならば、人の子か弟などに成て、親に尋ね逢ひ、兄の別を慕ふなどにてあるべし。是、其人体に似合風体也。たとひ、親子の物まねになしとも、老体の物まね、児の態に似合べからず。

　又、年寄りたる為手も心得べし。面を掛け、姿をそれになす事は、是非なき物まねなれども、あまりに年闌けて、似合ぬ風体は、よそ目それにならず。たとへば、若為手の老を学ぶは、子細あるべからず。さのみに年寄りたる為手の、人の息女になり、又は、敦盛・清経など云ふ名将の若殿上人などになる事、見所の思成、更にそれにならず。心得べし。

然ば、能を書事、其為手の風体に似合かなふべきを見宛てがふ事、是、一大事也。為手の瑞風を見分て、能を知らではかなふべからず。書手の一大事、是也。

一、大よそ、三体の能懸、近来押し出だして見えつる世上の風体の数数。

　　八幡　相老　養老　老松　塩釜　蟻通　　如此老体数数。

　　箱崎　鵜羽　盲打　静　松風村雨　百万　浮船　檜垣の女　小町　　如此女体。

　　通盛　薩摩守　実盛　頼政　清経　敦盛　　如此軍体。

　　丹後物狂　自然居士　高野　逢坂　　如此遊狂。

　　恋の重荷　佐野の船橋　四位の少将　泰山もく　　如此砕動風。

此能共を以て、新作の本体とすべし。

　凡、近代作書する所の数数も、古風体を少うつし取りたる新風也。昔の嵯峨物狂の狂女、今の百万、是也。静、本風有。丹後物狂、昔、笛物狂也。松風村雨、昔、汐汲也。恋の重荷、昔、綾の大鼓也。自然居士、古今有。佐野の船橋、古風有。如此、いづれもいづれも、本風を以て再反の作風也。其当世当世によりて、少少言葉を変へ、曲を改めて、年年去来の花種をなせり。後後年以て同反たるべき定、如此。

大方、能の是非分別の事、私ならず。都非・遠近に名望を得る芸風なれば、世以隠れあるべからず。然ば、能の風曲、古体・当世、時時変るべきかなれ共、昔より、天下に名望他に異なる達人は、其風体、いづれもいづれも幽玄の懸を得たり。古風には田楽の一忠、中比、当流の先士観世、日吉の犬王、是はみな、舞歌幽玄を本風として、三体相応の達人也。其外、軍体・砕動の芸人、一端名を得ると云へ共、世上に堪へたる名聞なし。さるほどに、誠の幽玄本風の上果の位は、時時当世によりても、見風変るまじきかと見えたり。

　仍、幽玄の花種を本風として、能を作書すべし。返返、上代・末代、古今、年年去来に、芸人の得手得手様様なりといへ共、至上長久に、天下に名望を得る為手に於いては、幽玄風のみなるべし。古名をば聞及、当代をば見分して、都非一同の名を得たらん芸人の得手の証見、幽玄の花風を離るべからず。

凡、如此、近年の見聞を案得して、大概を書する所、応永年内の作能の数数、末代にも、さのみ甲乙あらじと覚えたり。此条条を能能悉すべし。

右、此一帖、息男元能秘伝為所也

　応永卅年二月六日　　　　　　　　　世阿（花押）